様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１７５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０７５１

研究課題名（和文）人工的日英バイリンガル養育児における英語疑問文と関係詞構文習得の縦断的研究

研究課題名（英文）A Longitudinal Study of the Acquisition of English Interrogative Sentences and Relative Clauses by Japanese-English Bilingual Children

研究代表者
御手洗　靖（Mitarai, Yasushi）

大分大学・教育福祉科学部・准教授

研究者番号：８０２２９７３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　900,000円、（間接経費）　270,000円

研究成果の概要（和文）：日英バイリンガル女児による英語の疑問文の発話を分析して，次の結果を得た。(1) 特定の疑問詞，主語，助動詞の習得にとどまり一般化に至らない。(2) ３歳半まで定型表現に依存する。(3) ５歳までWhy疑問文を習得しない。(4) 使用頻度はインプットを反映する。また，目的格関係詞節を分析し次の結果を得た。(1)関係詞節の型はOO型が多かった。(2)関係詞は，what，接触節，thatの順序で出現した。(3)主節がない発話は少数であった。(4)関係詞節内の主語はIが大多数であった。(5)先行詞には，whatやthingで終わる単語が多用された。(6)再叙代名詞の誤りや前置詞の脱落が見られた。

研究成果の概要（英文）：Utterances containing an objective relative clause which a Japanese-English bilingual child produced between ages 5-12 were analyzed. Results show the following: The child (a) produced far more OO-type than SO-type relative clauses; (b) used the relative pronoun what first, followed by the contact clauses and that; (c) produced very few relativized noun phrases without main clauses; (d) used the pronoun I most frequently as the subject of relative clauses; (e) frequently used what or nouns ending with -thing as antecedents but also used other nouns; and (f) produced resumptive pronouns and dropped required prepositions in relative clauses.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学外国語教育

キーワード：日英バイリンガル　言語習得　英語

１．研究開始当初の背景

近年，早期英語教育への関心が増大し，研究書と一般書共に多数出版されている。しかし，これらには，日本人の子どもが英語を習得してゆく過程の記述が欠落している。

応募者は，父（応募者）が英語，母が日本語という環境の下で養育している，幼児の英語習得について，比較的単純な構造を縦断的に研究してきた。

今回の研究では，より発展的な複雑な構造である Wh 疑問文，関係詞節を対象にする。これらは，主流派である「規則習得」派の言語規則の枠組みの要である，「Wh 要素の移動」を伴うとされ，同派の理論の正当性を立証するために使われる代表的な構造である。これらの構造をめぐって，規則習得派の言語習得理論では，個々の表現に共通した規則が一度に習得されるとされ，usage-based モデルでは，個々の表現が別々に習得されるとされている (Dabrowska, 2000; Rowland & Pine, 2000; Rowland et al. 2003)。

２．研究の目的

本研究においては，蓄積した言語習得のデータベース（コーパス）に基づき，これら２つの理論のうち，usage-based モデルが実際の言語習得をよりよく説明できることを検証する。英語のインプットが比較的少ない状況での幼児の日々刻々と変化する英語習得の過程を密度の濃いデータにもとづき，縦断的に詳述しようと試みた。

３．研究の方法

父親が英語(外国語)，母親が日本語(母語) で養育をした「人工的」日英バイリンガル児を対象児とし，その発話のミニコーパス（発話のフィールドノートと録音の書き起こし）を資料とした。その資料から関係詞節を含む文を抽出して分析した。

４．研究成果

４.１疑問文の習得

(1)What are you PROCESS-ing

(a)インプットからの定型表現の産出を中心としたために，誤りは少ない。(b)What are you PROCESS-ing の"PROCESS-ing"にチャンクを入れる，並置と重ね合わせ Dabrowska & Lieven, 2005)が見られたが，What＋BE＋THING + PROCESS-ing まで抽象化できていない。

(2)Wh- ＋ DO/DID ＋ you/THING + PROCESS

(a) What を Where に代用。(b) What 以外の wh-語の発話は極少数。(c) You 以外の主語は極少数 。これらにはインプットが影響していると考えられる。

(3)Why is/are THING PROCESS-ing

(a) Why ＋ THING ＋ PROCESS や Why (+THING) is PROCESS-ing を個別に習得。(b) Why do/did you が少ないのは，インプット量の不足。(c) Why are you + PROCESS-ing は安定化し，過般化もみられる(d) Why+ AUX + THING + PROCESS のスキーマは安定していない

以上から，次の結論が得られた。(a) 特定の疑問詞，主語(you)，助動詞の組み合わせの習得にとどまり一般化に至らない，(b) 3;8 まで限られた定型表現を利用する (Dabrowska, 2000)，(c) 4;10,23 まで Why 疑問文の習得が遅れる (Rowland & Pine, 2000), (d) 使用頻度はインプットの頻度を反映する（Rowland et al. 2003），(e) 誤りは，インプット不足による定着 (entrenchment) の失敗，(f)時期ごとに異なる助動詞を使用するのはインプットが原因であり，重ね合わせる単位の誤り（Dabrowska & Lieven, 2005 ; Rowland & Pine, 2000)。

４.２関係詞節の習得

(1)関係詞節の型

関係詞節の型は OS 型が多数で，全 157 の発話中，SO 型は 11 例であった。これは，5 歳までの主語の位置での関係詞節の発話が極端に少なかった Diessel and Tomasello (2000)と一致している。会話コーパス研究でも主語の位置の関係詞節は少ないという記述もあることから，対象児が受けたインプットにおける SO 型の少なさが，発話数の少なさに影響したと思われる。。

(2)関係詞の出現順序

関係詞の出現は，接触節，what，that の順序であった。これには，インプットが影響していた。Diessel and Tomasello (2000)は，習得初期における発話の特徴として，主節がなく先行詞と関係詞節だけから構成される名詞句の発話が多いとしているが，対象児の発話には７例しかなかった。しかし，比較的初期に使用が多いという点では類似していた。

(3)関係詞節内の主語

I が最も多く you がそれに続く。Kidd et al., (2007) において，一人称（I と we）が 55%，二人称(you)が 30%を占めていた。対象児に you が多くない原因には，I を使った関

係詞節がインプットに多かったことが考えられる。

(4)主節の先行詞の種類と出現頻度。

5-6 歳においては「what」,「脱落」,「that」という，what の表出を意図した発話が最も多かった。what の音声表現ができなかった例や, what を意図したが"that"を発声してしまった例があった。これらは what の持つ「～すること・もの」という単一の意味が発話に結びつきやすいことを示唆している。慣れ親しんだ２つの節を並置しただけで，その際に what を脱落させたのだと思われる。

Flynn and Lust (1980)は，子どもは that を what で置き換える傾向があり，名詞よりも what を先に先行詞として習得するとしている。また，Diessel and Tomasello (2005)は，子どもが that や who を what に置き換えたと報告している。これらの研究が what という形式の過般化を示しているのに対して，対象児は what の意味を理解して発話意図としては多用するものの，形式の正確さが追いついていない。what の多用という点では共通しているものの，形式の習熟度に差があると言えるだろう。

(5)誤り

4 歳から 9 歳までが多く，9 歳では減っているものの，10 歳以降も誤りが続いている。誤りは２種類に大別できる。１種類目は，先行詞および関係代名詞の選択にかかわる語レベルの誤りである。これらは 7 歳以降に減少している。もう１種類は，次のような,「統語」,「再叙代名詞」,「前置詞無し」,「節並置」といった節レベルの誤りで，習得した文をそのまま関係詞節として使用した点で共通している。これらの誤りは 7 歳以降も続いている。次例で関係詞節が<助動詞>＋<主語>＋<動詞>という疑問文の語順になっている。これは，what 疑問文を定型表現として主節に続けて発話する，節並置の方略を使用している。

[5;9,20]I can't hear what did you say.

次例では，自分の直前の発話の"the thing"を"what"に入れ替えて，"That's what I said."と言おうとしている。これは Lieven et al. (2003) が提唱する，「入れ替え(SUBSTITUTE)」という創造的方略が，関係詞節においても使われることを示す例である。

[8;,1,11] That's the thing that I said. That's the what [I] said .

次例の「再叙代名詞」の"it"は，幼児に関係詞節構造を反復させる研究でも報告されている（Diessel & Tomasello, 2005)。Labelle (1990) は，再叙代名詞の使用は，単に主節と従属節を並べる「並置方略」を使い，"it"の位置に空所(gap)を設けるという意識がない証拠であると主張する。 対象児もこの方略を使っていると考えられる。

[5;7,23a] I know something I do <u>it</u> in the kindergarten.
[5;8,15] I'm gonna wear the clothes ... that I haven't wear <u>it</u>.

類似の誤りに,「前置詞なし」があった。本来は前置詞のあとに，先行詞が残した空所があるはずだが，再叙代名詞の誤りと同様に,対象児には空所の意識がなく，節を並置していることを示唆している。

[5;10,11] Earth is something people live [in].

しかし，10 歳以降には，前置詞で終わり後ろに空所がある発話が見られた。

[10;2,2] I will buy the notebook that the picture of fur seals' baby is on [空所].
[10;6,27] You have a bag that you put your bag into[空所].

対象児の英語力が高まるにつれて，前置詞で終わる関係詞節のような，インプット中のより複雑な形式への注意力も高まり，それらを自分でも使用できるようになったためだと思われる。

以上をまとめると(1)関係詞節の型は OO 型が多かった。(2)関係詞は，what，接触節，that の順序で出現した。(3)主節がない発話は少数であった。(4)関係詞節内の主語は I が大多数であった。(5)先行詞には，what や thing で終わる単語が多用された。(6)再叙代名詞の誤りや前置詞の脱落の誤りは，節の並置という方略の結果であった。

以上の成果により，バイリンガル児の疑問文，関係詞節の習得における，インプット与える影響や，入れ替え，重ね合わせ，節の並置，という，用法基盤理論で提唱されている言語習得の方略の使用が認められた。また，疑問文と関係詞節の両方において，習得は既習の定型表現とその再利用に依存しており，かつ一気の習得ではなく漸進的であることを確認できた。これは，早期から英語教育を行うだけで英語を容易に習得できるという，過大な期待に対しては慎重にならなければならないという示唆を与えるものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①<u>御手洗靖</u>　**人工的日英バイリンガル養育児における英語の目的格関係詞節の発達**
大分大学教育福祉科学部研究紀要　査読有り　第 36 **巻　第１号**　2010 **年** 79-90

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

６．研究組織
(1)**研究代表者**
御手洗　靖（MITARAI YASUSHI）
大分大学・教育福祉科学部・准教授
研究者番号：80229731